

令和 2 年 5 月 17 日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02283

研究課題名(和文) 第二次世界大戦期におけるマティスの芸術活動研究 - フランス性と戦争文化の視点から

研究課題名(英文) Study on Matisse's artistic activities during the Second World War: From the view point of Frenchness and war culture

研究代表者

大久保 恭子 (Okubo, Kyoko)

京都橘大学・発達教育学部・教授

研究者番号：70293991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は第二次世界大戦期のマティスの芸術活動の実態を調査し、戦争文化の視点から、マティスに関わる言説における「フランス性」という概念を、他のモダニズムの芸術家と比較検討しつつ明らかにすることを目的とした。前衛的なモダニズムとは一線を画す穏健なモダニストというマティスの評価は、占領下での中庸を旨とする国家的アイデンティティ即ちフランス性と不可分に結びついていた。マティスはフランスの伝統を具現しその文化的優位を体現する存在と受け止められたが、この時期のマティスの芸術場を特徴づけたのは、政治的中間ゾーンに位置して戦争と距離を取りいわずに不在によってフランス芸術のシンボルとなるメカニズムであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、1937年パリ国際博覧会でマティスの関与が拒まれたという通説を事実関係の調査によって覆し、マティスがフランス性に繋がる評価を得ていたことを明らかにし、一方、時の政権による前衛的なモダニスト擁護の姿勢を明確にして、フランスの文化政策の要諦を示し、この時期の美術史研究に新視座を提示した。さらに国際シンポジウム「第二次世界大戦期のフランスをめぐる芸術の位相」を実施して国内外に向けて問題提起を行い、反響を得、戦争文化の視点から戦時下のフランス美術研究の新局面を開くことに成功した。

研究成果の概要(英文)：The study investigated the artistic activities of Matisse during the World War period, aiming at clarifying the "Frenchness" in discourse related to him from the perspective of war culture. It included comparison with the avant-garde modernists. Matisse's reputation as a moderate modernist, which sets his work apart from avant-garde modernism, was inseparably linked to a national identity of moderateness under occupation, namely Frenchness. Matisse was perceived as embodying the French tradition and its cultural superiority, but what characterized Matisse's champ d'art during this period was that it was located in the political middle zone, keeping a certain distance from the war. It was also characterized by the mechanism of being a symbol of French art due to this "absence".

研究分野：美学美術史

キーワード：マティス 第二次世界大戦 パリ国際博覧会 フランス性 中庸 プリミティブ 戦争文化 モダニズム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦期、フランスの芸術家アンリ・マティスはドイツによる占領下の祖国に留まり芸術活動を展開した。この時期の活動を問うことは、その芸術上の意味のみならず、戦時下での芸術そのものの意義を問うことでもある。しかしこの問題を検討する論理的枠組みはいまだ形成途中にある。

マティス研究は2000年以降大きく展開し、かつてのモダニズムの枠組みでマティスを理解することからの脱却が図られ、最終的な作品に限定してマティス芸術を理解するのではなく、制作過程をも含める作品概念に依拠してその意味を捉えるようになり、制作行為に論点が集中する傾向が見られた(Cf. 『マティス Henri Matisse: Processus / Variation』, 2004年. Stephanie D' Alessandro and John Elderfield(eds.), *Matisse: Radical Invention 1913-1917*, 2010. Cécile Debray(dir.), *Matisse: Paires et séries*, 2012)。しかしこの新段階においても十分に検討されていない視点は作品と歴史的時間の関わり、あるいは作品を生み出した特定の時空間との連動性へのまなざしである。この視点に立った研究の必要性は、世界大戦期の芸術活動を考えるとき極めて大きい。

一方世界大戦期の文化を検討する動きは近年活発化し、第一次世界大戦期～30年代の外交史・軍事史中心の研究、1960年代の社会史的研究を踏まえて、新たに1990年代から文化史的関心を併存させる「戦争文化」なる視点が打ち出された(Cf. ジャン＝ジャック・ベッケール、ゲルト・クルマイヒ、『仏独共同通史 第一次世界大戦』, 2012; Jay Winter & Antoine Prost, *The Great War in History*, 2005)。第二次世界大戦に関しては、外交、軍事、社会史的研究は進展してきたものの、文化史的視点からの研究はまだ緒に就いていない。それゆえ第二次世界大戦期の芸術的位相を、第一次世界大戦研究に成果をもたらした戦争文化という論理的枠組みを援用して考察する研究が必要であると考えた。

第二次世界大戦期のフランスにおける芸術界の位相についてはローランス・ベルトラン・ドルレアクが詳細な資料を呈示している(Cf. Laurence B. Dorléac, *L'art de la défaite : 1940-1944*, 2010)が、そこで示される芸術的状況は様々な方向性を持つ芸術運動が錯綜した両大戦間期の芸術的動向が下敷きになっている。両大戦間期には第一次世界大戦以降の「秩序への回復」の潮流のなかで古典回帰の動きが目立つ一方、前衛の実験の成果を継承しつつモダニズム芸術を存続させようとする努力もあった。フランスはモダニズム芸術をフランス的とはみなさなかったが排斥もせず、この文化面での寛容さは反ナチズムの姿勢を反映しており、1930年代のフランス美術史再編に伴う「フランス性」の概念に影響を与えた(山本友紀『フェルナン・レジェ オブジェと色彩のユートピア』, 2014)。しかしこれらの概念闘争が固定的な論拠に基づかず、常に相対的に展開したために大戦期の芸術界の様相は流動的で、フランス性の何たるかも不明確に成らざるを得なかった。

この時期マティスは、それまでの芸術場の崩壊に直面しつつ占領下のパリと自由地区(のちにはイタリアに占領される)ニースという分断された祖国を行き来して、多重の読み取りを可能にする切り紙絵作品『ジャズ』を制作し、流動的で多様な場の特性を視覚化した(大久保恭子『アンリ・マティス『ジャズ』再考』, 2016)。本研究目的は『ジャズ』研究の延長上に位置づけられるものであった。

したがって本研究課題は第二次世界大戦期のマティスの芸術活動の検討と、戦争文化という新視点からの第二次世界大戦期のフランス性の検討という二つの軸を持っていた。しかしこれまで、この二つの軸を連関させた研究は成されてこなかった。本研究は、上記の視点から、第二次世界大戦期の芸術場におけるマティスを相対化しつつ動的に位置づけようとするものであり、それにより美術史学上での新知見を生むだけでなく、第二次世界大戦研究の新局面を開くものになると考えたのであった。

2. 研究の目的

第二次世界大戦期、マティスはドイツによる占領下の祖国フランスに留まり芸術活動を展開した。この時期の活動と評価とを歴史的背景を考慮して検証することはいまだ成されていない。本研究の目的は「フランス性」という概念形成に着目して、作品分析のみならず、発注、制作実態と制作過程、出版、展覧会での展示といった制作環境と、占領下での評価、それ以前と以後の評価といった受容を、「戦争文化」の論理的枠組みにおいて検証することにあつた。大戦期にマティスをめぐる芸術場がいかに変化し、どのような意味を持ち得たかを、一世代若いモダニズムの芸術家との比較検討を通してフランス性と戦争文化の視点から明らかにすることは、マティス研究に新展開をもたらすだけでなく、第二次世界大戦研究の新局面を開くことになるだろう。マティスをめぐる大戦期の芸術場を検討するにあたり具体的に以下の三つの目標を掲げた。

- (1) 大戦前の1937年のパリ国際博覧会で、現存するフランスの主な芸術家たちは依頼を受けて壁画を制作したがマティスは依頼をされなかった。なぜマティスは忌避されたのか。一方で国際博と同時開催されたパリ市主催の「独立派美術の巨匠」展ではマティス作品がフランスの「現代美術」としてモダニズムの画家たちとともに展示された。この点に着目してレオン・ブルム内閣において選出された国際博の組織委員の意図と「巨匠」展の意図との連動性と差異を明らかにする。
- (2) 大戦期のマティスの交友関係はアルシーヴ・アンリ・マティスに保管される書簡から推測できる。この調査を起点に当時のマティスをめぐる芸術場の形成を、芸術家、画商、編集

者、批評家を含んだ言説上で跡づけ、その中での制作、出版、展示を通して作品の意義を明らかにする。一方、モダニズムの芸術家たちをめぐる芸術場を言説と制作の視点から明確にする。

- (3) 大戦期、マティスの評価は総じて高かった。当時マティスの芸術場の形成に一役買ったルイ・アラゴンはマティスとフランス国家とを結びつけて評価した。当時の言説を分析しつつフランス性という概念を明確化し、戦前と大戦期のマティス評価の変化の意味するとすると戦争文化の視点におけるフランス性との関連を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究には研究代表者・大久保恭子と研究分担者・山本友紀の二名が従事した。モダニズムの芸術家を中心とする検討は研究分担者の山本、マティスの大戦期の活動実態とその評価の検討ならびに研究分担者の研究成果を本研究の主たるテーマに統合させる作業は、研究代表者が担当した。

- (1) 平成 28 年度は本研究の基礎となる資料の所在を確認し、資料収集を行った。
研究代表者は国内で入手可能な先行研究書を収集した上で、フランス国立公文書館で 1937 年パリ国際博覧会関連の一次資料を収集、またアルシーヴ・アンリ・マティスで第二次世界大戦期の書簡の調査を行った。資料の分析を経て京都大学人文科学研究所主催の研究会「現代 / 世界とは何か」において 1937 年パリ国際博覧会で視覚化された「中庸」の概念についての報告を行った。
分担者は国内で入手可能なモダニズム関係の文献収集を行い、関連事項をリスト化して、フランス国立図書館及びフランス国立公文書館で調査を行い、1937 年パリ国際博覧会におけるフランス性とモダニズムとの関連をめぐる国家戦略の考察を行った。
- (2) 平成 29 年度は前年度に引き続き現地調査と資料収集を中心に行った。
研究代表者はアルシーヴ・アンリ・マティスで大戦間期から第二次世界大戦期の書簡を中心とした一次資料を集中的に収集した。資料分析を踏まえて大戦間期の文化受容における大衆の果たした意義を考察した。また 1937 年パリ国際博覧会で、ほとんどマティスのみがそれへの関与を拒まれたというこれまでの通説を事実関係の調査によって覆し、マティスがフランス性につながる評価を得ていたことを明らかにした。
分担者は 1937 年パリ国際博覧会でのシャイヨー宮の壁画を分析し、その作品選別に「フランス的なもの」に関わる価値観が反映していたことを明らかにした。
- (3) 平成 30 年度は前年度までの研究の進捗状況を精査して今後の研究計画を見直し、本研究課題に必要な現地調査を追加して行い、国際シンポジウム開催のために研究期間の一年延長を申請した。
研究代表者は本研究課題の先行研究が限定的であることから、マティスの芸術場を相対化し動的に捉えるために、ソフィア王妃芸術センターで第二次世界大戦期のモダニズム芸術作品展示を中心に調査し、バルセロナのピカソ美術館でスペインにおけるプリミティブとモダニズムとの関わりを調査、またパリのピカソ美術館とケ・ブランリー美術館の調査でモダニズム作品とプリミティブな造形物との比較調査を行った。またパリ・ナンテール大学のレミ・ラブリュス氏と次年度の国際シンポジウムの内容について討論を行った。収集した資料を分析し、1937 年パリ国際博覧会におけるフランスの文化政策をフランス性と中庸の観点から考察した。加えて美術史学と民族学の歴史的関連について考察、その視点を発展させて美術史学と人類学の近年の近接と将来的な協働に関して考察を行った。
分担者はこれまでの資料を分析して、アメリカ合衆国独自の伝統と機械時代との関わりについて国際シンポジウム「20 世紀視覚芸術・文学における前衛的リアリズム (1914 ~ 68 年)」で報告を行った。
- (4) 最終年度は、前年度の研究計画の見直しを受けて、これまで日本ではそれに特化されて開催されることのなかった第二次世界大戦期のフランスの芸術の諸相をめぐる国際シンポジウムを企画し実施した。
研究代表者は 9 月に京都大学で国際シンポジウムを企画し実施した。その詳細は研究成果の項目で述べる。
分担者は一次資料の検証に基づき、第二次世界大戦期フランスのモダニズム美術の展開と受容について、上記シンポジウムで問題提起を行った。

4. 研究成果

- (1) 研究代表者は 2016 年 10 月 22 日に京都大学人文科学研究所において「現代 / 世界とは何か？」研究班共同報告「1937 年 - 芸術・社会・政治」の中で、レオン・ブルム内閣の国家戦力として 1937 年パリ国際博覧会でモダニズムとプリミティヴィズムが重なりつつ会場全体で中庸の概念の視覚化を行ったことを明らかにして、本研究の目的として掲げたマティスの芸術場の検討の基礎となる報告を行った。また分担者も上記博覧会の壁画を分析し、そこにレオン・ブルム内閣のモダニズム擁護の文化政策があったことを明らかにした。
- (2) 2017 年の夏季調査資料分析によって研究代表者は、国家的文化政策の一環をなした 1937 年

パリ国際博覧会から、ほとんどマティスのみが遠ざけられたというそれまでの通説を覆し、博覧会の一部として開催された展覧会においてマティスが、フランス性を特質とする穏健なモダニストとしての役割を担っていたことを明らかにし、第二次世界大戦直前のマティスの評価をめぐる議論に新しい視座を提示した。

- (3) 2018年9月28日、名古屋大学における国際シンポジウム「20世紀視覚芸術・文学における前衛的レアリスム(1914~68年)」で分担者は、アメリカ合衆国におけるプレジジオニストの美学と語彙の重要性を検討し、アメリカの伝統との親縁性を考察する報告を行い、モダニズムの芸術家をめぐる言説研究に一石を投じた。
- (4) 2019年9月28日、研究代表者は京都大学において国際シンポジウム「第二次世界大戦期のフランスをめぐる芸術の位相」を実施した。パリ・ナンテール大学のレミ・ラブリュス氏が1940年代のフランス美術の動向全体について基調講演を行い、日本側からは4名の登壇者が、コラボレーションと収容の問題(河本真理)、国家による独立派芸術作品の買い上げ問題(松井裕美)、モデルニテと大戦期フランス美術との関係(研究分担者)、大戦期のフランス性をめぐる芸術的地政学(研究代表者)に関する問題提起を行い、第二次世界大戦期のフランス美術研究における新局面を開くことができた。また代表者の報告は、第二次世界大戦期のマティスの芸術場が政治的中間ゾーン(地中海リーグ)に位置していたことを明確にし、その場を支えたフランス性と中庸の概念が「戦争文化」に結びついていたことを明らかにした。
- (5) 引き続き研究代表者と分担者は上記国際シンポジウムの内容を広く発表することを確認した。令和3年度に図書として刊行することを目指し、複数の出版社への打診を経て、現在出版社と出版企画を検討中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大久保恭子	4. 巻 45
2. 論文標題 1937年パリ国際博覧会をめぐるフランスの文化政策	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都橘大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 65-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本友紀	4. 巻 7
2. 論文標題 坂田一男とパリのアカデミー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SAKATA	6. 最初と最後の頁 65-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大久保恭子	4. 巻 44
2. 論文標題 大戦間期から第二次世界大戦期におけるマティスの批評的位置付けをめぐる考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都橘大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 45 - 58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大久保恭子	4. 巻 34
2. 論文標題 交差する美術史学と民族学 現代美術への独創的アプローチ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 民族藝術	6. 最初と最後の頁 41-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大久保恭子	4. 巻 36
2. 論文標題 大戦間期のプリミティヴィスム 文化の受容層をめぐって	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 147-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本友紀	4. 巻 36
2. 論文標題 装飾芸術の公共性 1937年パリ万博の壁画作品を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日仏美術学会会報	6. 最初と最後の頁 23 - 38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本友紀	4. 巻 第7号
2. 論文標題 機械美学と写真 1930年代フランスにおける芸術と社会	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 あいだ / 生成	6. 最初と最後の頁 15 - 26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本友紀	4. 巻 第68号
2. 論文標題 1930年代フランスにおける壁画の特質と時代的意義 モダニズム芸術の社会性	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 デザイン理論	6. 最初と最後の頁 49 - 62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 大久保恭子
2. 発表標題 第二次世界大戦期の「フランス性」をめぐる芸術的地政学
3. 学会等名 国際シンポジウム「第二次世界大戦期のフランスをめぐる芸術の位相」（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本友紀
2. 発表標題 モデルニテの遺産と第二次世界大戦期のフランス美術
3. 学会等名 国際シンポジウム「第二次世界大戦期のフランスをめぐる芸術の位相」（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大久保恭子
2. 発表標題 第二次世界大戦期のフランス美術：戦争と文化
3. 学会等名 第37回現代語・現代文化フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大久保恭子
2. 発表標題 世界大戦間期フランスの普遍と中庸をめぐる文化政策
3. 学会等名 日本比較文化学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本友紀
2. 発表標題 抽象とリアリズムの間で 大戦間期におけるキュビズムの二重の解釈
3. 学会等名 国際シンポジウム「20世紀視覚芸術・文学における前衛的レアリズム(1914 - 68年)」(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大久保恭子
2. 発表標題 現代美術とプリミティヴィスム
3. 学会等名 民族藝術学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大久保恭子
2. 発表標題 境界侵犯者としてのピカソのプリミティヴィスム 変奏と独創
3. 学会等名 国際シンポジウム「ピカソと人類の美術」(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本友紀
2. 発表標題 坂田一男とパリのアカデミー
3. 学会等名 坂田一男研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大久保恭子
2. 発表標題 1937年パリ万博をめぐるフランスの文化政策
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所「現代／世界とは何か？」研究班
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山本友紀
2. 発表標題 装飾芸術の公共性 1937年パリ万博の壁画作品を中心に
3. 学会等名 日仏美術学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 大高保二郎、永井隆則、大久保恭子、河本真理、松井裕美、孝岡睦子、久保田有寿、松田健児、ロランス・マドリヌ、東海林洋、安發和彰、塚田美香子、カテリーナ・ザッビア、天野知香、田中正之、町田つかさ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 506
3. 書名 ピカソと人類の美術	

1. 著者名 木島俊介、大久保恭子、アラン・タピエ、天野知香、岡坂桜子、六人部昭典、長名大地、工藤弘二、近藤萌絵	4. 発行年 2020年
2. 出版社 求龍堂	5. 総ページ数 231
3. 書名 モネとマティス もうひとつの楽園	

1. 著者名 山室信一、大久保恭子、野村真理、林志行、三原芳秋、小川佐和子、立木康介、藤井俊之、森本淳生、金澤周作、久保昭博、藤原辰史、河本真理、小関隆、中野耕太郎、布施将夫、伊東信宏、中本真生子、岡田暁生ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 217
3. 書名 人文学宣言	

1. 著者名 大久保恭子	4. 発行年 2016年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 357
3. 書名 アンリ・マティス『ジャズ』再考 芸術的書物における切り紙絵と文字のインタラクション	

1. 著者名 永井隆則、大久保恭子、石谷治寛、鈴木慈子、廣田治子、山本友紀	4. 発行年 2016年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 278 (187-230)
3. 書名 場所 で読み解くフランス近代美術	

1. 著者名 永井隆則、山本友紀、大久保恭子、石谷治寛、鈴木慈子、廣田治子	4. 発行年 2016年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 278 (231-268)
3. 書名 場所 で読み解くフランス近代美術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

